

## 雑草通信

船津好明 1936年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さって構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

### 他界観

他界とは、人間の想像から生まれた世界をいう。「想像」は「思考」と言い換えることもできる。他界の姿や意味についての考え方が他界観である。他界と実世界の関係は、浅深濃淡あって多様、千差万別、他界の内容は人によって異なる。他界と実世界は交差する。

想像とは言っても、睡眠中の夢はどうか。夢は意図によらずに脳裏に現れる情景で、他界をなしているようにも思われるが、筋も一貫せず、他界観も定まらないし、本稿では取り上げない。しかし、睡眠中に夢を見ることは、正気のときの想像に関係する心理作用のように思われる。

他界観は古今東西どこにもある。他界は多くの場合、人智を超えたものになる。「あの世」も他界に当たる。他界を言い換えれば、脳裏に意図的に描かれる時間的空間的な情景と言うこともできる。他界は実世界を支配し、生活の指針になることもある。

想像(思考)と事実は同じか違うか、どちらが先か後か、など哲学じみた話はここではしない。

人は誰でも想像する。過去を思い出す、疑問が生じて答えを探す、はっと知恵が浮かぶ、明日は図書館へ行っての本を借りよう、試験を受けて合格を祈る、宝くじに当たったらを買いたい、このような思考は他界なのか。他界か否かの判別基準はあるか。

想像(思考)は主観であり、主観を他界か否かと客観的に論じて不毛であろう。他界、否、どちらでもよい。

人が脳裏に何かを描いたとき、即ち何かを想像したとき、想像したこと自体は事実である。即ち他界の存在は、その人にとっては事実である。しかし、その想像内容を他人が認識することはできない。したがって、その想像内容を他人に知らせるには、絵に描く、映像や動画にする、造形で表す、演技する、文にする、音にする、語る、更にこれらの組み合わせなど、誰にも認識できる実世界の媒体によって示さなければならない。こうしてできる媒体を通して、人々は他人の想像内容を知り、その意味を理解し、価値を覚えれば、その想像内容は広く知られていく。そして他界観が人々の心の中で、時に無意識に、自然に形成されていく。それが世間で知られる他界である。

想像したことを他人に知らせず、想像が自己の脳裏から出ない場合でも、自分だけの他界ができ、他界観を持つことができる。

他界は人間にとって、時に憧れであり、理想であり、天国であり、時に恐怖であり、戒めであり、地獄であり、時に霊力が働き、魔法が効く。これらが組み合わせられることもある。著名な他界は、人間が思考の限りを尽くして生み出したものである。人間は他界から大切な事を学び取り、実世界に活かされる。人間は他界と無縁ではあり得ない。

浦島太郎が浜辺で瀕死の亀を助けて、亀が恩返しに太郎を海底の竜宮城に案内し、太郎は乙姫

の歓待を受けて時を忘れる。太郎は潜水具もなく海底で乙姫と暮らし、歳月を経ても老いない。太郎は他界で暮らしたのである。やがて元の浜辺に戻るのだが……。この童話に潜む教訓は、実世界に生きる我々に対するもので、誠に見事である。

他界は自然科学の立場で理解すべきものではない。それどころか自然科学と共存できる。太陽に神が宿っているという話は、科学がいかに進歩しても価値を失うものではない。科学の世界にも解らない分野があって、科学者達は真実を想像して筋書きを作る。仮説を立てて実験や観測などによって真偽の確認に努める。仮説は真の場合もあるし偽の場合もあるが、他界的性格を持つ。

他界は宗教と関係が深い、宗教に限らず、人間のあらゆる分野に関係する。人々は想像を逞しくし、他界を設定し、現実を顧みる。そして人智が発展する。他界は天国でも地獄でも、人々を目覚めさせ、戒め、教え、心を和ませ、安らぎや希望を与える。

他界は我々の身近な所にたくさんある。おとぎ話、童話、民話、神話などの殆どは他界が舞台であり、多くは超自然的で、他界観が潜在している。これらを作り話と言って軽視する人はいない。誰もがそれなりに受け止めている。小説など文学に描かれる世界も他界である。夏目漱石の小説では猫が物を言っている。文学は演劇となり、映像や動画となるなど、我々の身近に拡がり、人々を楽しませている。ゴジラもウルトラマンも妖怪も然り、もはや他界の意識はない。我々は無意識のうちに他界に漬かっている。他界の中に実世界があったり、実世界の中に他界があったりするのを、我々は錯覚と思わず、不思議とも思わない。

沖縄地方に、海の彼方に理想郷があるという伝説的な話がある。生活に関わる全ての事柄は、神が司るという思考上の世界で「ニライカナイ」とも言われる。善も悪もある。その具体的な姿は地域や個人によって多様だが、ニライカナイこそ他界に他ならない。

他界観は地域や人によって様々で、必ずしも首尾整っている訳ではない。貧困や苦悩を反映したものも少なくない。ある理想の他界では、人々は衣食足り、歳をとっても老いない、死なない、病気もない、犯罪もない、争いもない、陸では万作、海では豊漁、人は千里眼を持ちどんな所をも見ることができる、移動は空を飛びどこへでも行くことができる、恋は意のままに成就できる、魔法が叶う、など善いことづくめで際限がない。悪い方の他界では、地獄絵に見られるように、様々な厳しい責めに苦しめられる。

全ての生物（植物も）は、自他を識別し、他（た）が自（じ）の生命や種族の維持のために有害か無害か、敵か味方か、を判別する能力を持つ。それが出来なければ生物ではない。更に季節や気候などの環境を理解し、反応し、記憶もする。未来を予期して行動する。こういう能力は、進化の程度によって異なり、高等になるほど勝れると思われる。想像力があるかどうか。あれば他界を持つことになる。利口な動物には想像力があるかも知れない。人間は体の発達と共に想像力も発達し、脳裏で社会を想像（創造）できるようになる。多く人は、他界を死後の世界（あの世）のことと狭く考えているかも知れないが、本当はもっともっと広い。創作作家は少なくとも作品の数だけ他界を持っている。普通の人も、他界という言葉を意識せずに、想像の世界を持っているに違いない。私も自分だけの他界を少し持っている。

-----  
既刊（抄） 第7号 五感と美意識（4 視覚の巻）、 第8号 五感と美意識（5 聴覚の巻）